

現場に生きる女性たちが紡いだ「流域ものがたり」 ～分断と絶望のなかに、言葉のかけ橋を架けよう～

2026年7月5日開催 シンポジウム詳報集会報告(嘉田講演)

2020年7月の球磨川豪雨災害から6年。2026年7月5日に開催されたシンポジウムの第一部では、環境社会学者であり元滋賀県知事の嘉田由紀子参院議員が登壇。独自の社会調査と住民の生の声から見えた「川辺川ダムの実態」を熱く語りました。

① 行政主導の議論で埋もれた「声」をすくい上げる

壇上に立った嘉田さんは、一冊の本を掲げました。特急の本作づくりだったと振り返るその書籍『水害・ダム問題に挑む女性たち』(つり人社)は、地域を支える20人の女性たちの聞き取りから生まれたものです。「地域の組織を担う男性たちは、これまでの経過もあって本音が言えない。でも現場の女性たちは違いました」と語り、球磨川全域に宿る「命への深いまなざし」を紐解いていきました。

② 住民調査が証明した「ダム不効用」の冷厳な事実

行政は「ダムがあれば水位を下げられた」と説明します。しかし、嘉田さんらが被災者50人を対象に行った詳細な住民調査(何時何分にどこが浸水したか)のデータは、全く異なる事実を示しています。

「もし最上流にダムができていたとしても、あの日の命はほとんど救えなかった。これが調査から導き出された冷厳な事実です」

猛烈な雨が降ったのはダム予定地の上流ではなく、中下流域の山地だったからです。さらに、ダムによる「絶対安全」という誤った安心感(正常性バイアス)が、避難を遅らせる最大の危機になると強く警鐘を鳴らしました。

